「ハムド・リッラー・アッサラーマ（お帰りなさい）」
――10年ぶりのカイロ――

塩　尻　和　子
（昭和59年修士修了）

カイロ市は決して大きな街ではない。手元に資料がないので正確なことは分からないが，東京都で言えば新宿区一つか，せいぜい中くらいの区二つ分くらいの広さである。住宅街から下町まで車で10分か20分もあれば着いてしまう。歩いてもたいしたことはない。

しかし，街を取り巻く景観は雄大である。カイロはナイルデルタの根本，ちょうど扇のかなめの位置にあり，ナイル川の東側に市街地が広がっている。ナイル川の中に浮かぶ大小二つの島（ゲジーラ島とローダ島）は住宅地として発展し，東岸の市街地は高級ホテルの並ぶ川岸から官庁街，繁華街，市場，モスクの多い地区（イスラミック・カイロと呼ばれる），カイロの城壁跡（注1），サラーフ・ディーン・アイユーブが築いた要塞跡とムハンマド・アリー（注2）のモスク，死者の町（墓地），ムカッタムの丘まで続いている。

ナイル川の中の島のうち，ゲジーラ島は島のほぼ半分が緑に被われたスポーツクラブとなっていて，イギリスの影響を受けた最高級の住宅地である。もっともその住宅街も最近は汚れが目立ち，火炎樹やアカシア類の並木も盲滅法に建設された高速道路に遮られて，うらぶれた感じがする。間もなくナイル西岸の新開地ムハンデシーンにその座を奪われそうである。それでも今なお外国人の多くはこの地域にアパートを借りて住み，日本人も多い。かく言う我が家もこの地区のシャガレット・ドッルという女王（注3）の名前を冠した通りの9階にアパートを借りた。昔日の栄光はなくなったと言っても，買い物も便利で住みやすいことには変わりはない。

さてその東岸はナイルに面してヒルトンや，インターコンチネンタルなどの高級ホテルが立ち並び，その裏手に高層ビルの並ぶオフィス街，イギリス風に銅像を配したロータリーで結んだ繁華街が続いている。繁華街と言っても銀座のようなしゃれた，賑やかな街を想像してはいけない。日本のようなデパートなどはない。以前よりは品数がぐんと多くなったとは言ってもウィンドウショッピングを楽しめるほど趣味は良くない。ちょっとしたものでも何軒もの店を尋ね歩かねばならない。我慢をすれば使えるという程度である。道は舗装がとれかけてデコボコだらけ，上からは冷房機からの水が落ちてくる。しかし，ほこりまみれではあっても，100年以上を経た石造りの建物には細かな彫刻が施してあり，どっしりとした重みが感じられる。

さらに進むと，いきなりごみごみした下町が現れる。交通渋滞と人いきれ，喧騒と土ぼこり，ロバのいななき，荷車のきしみ。レンガを積んだ今にも崩れそうな建物でも上の方まで洗濯物が翻っていて，数えて見ると10階建てだったりして，驚かされる。ここでも手擦りや窓に精巧な木製の透かし彫りが見える。その路地へ一歩入ればここはもうすっかり千夜一夜の世界，中世へタイムスリップしたような不思議な静寂がある。むせるような土の臭いの中を，そそり立つモスクの塔とドームを見あげながらさらに進むと，ローマ時代の水道の遺跡とカイロの城壁の切れ目に有名なサラーフ・ディーン・アイユーブ（サラディン）時代の要塞が現れる。その先には道路を経て一段と低くなった土地に小さいモスクのドームが林立する一帯が広がる。灰色の市街，ひっそりと眠ったような町並み，人の気配の感じられないこの一帯は死者の町と呼ばれる墓地である。しかし良く見るとこの町の中にもバスが乗り入れて入るのが分かる。死者に供えられた供物を生活の糧とする人々が墓場を住居として住んでいるのである。しかもこの地区に隣接してカイロのゴミ収集場があり，

収集人がいわゆるギルドを作って集団で住んでいると言われている。行って見ると何日かはご飯が食べられないというほど汚くおどろおどろしい所だそうだが，今度是非一度尋ねて見たいと思っている。

そして街はムカッタムの丘と呼ばれる岩山で終わりとなる。岩山が最も高いところで２００メートル，茶色がかった灰色で南北に長く延びてカイロの東を固めている。ムカッタムとは「切り取られた」という意味で，ピラミッドの石はここから切り出されたと言われている。頂上にはレストハウスもあるはずだが，現在では軍事施設となっており，立ち入り禁止となっている。

それではそのピラミッドはどこに，と言えば，正確にはカイロ市内ではなく，ナイル西岸のギーザ市内のはずれにある。一般にギーザもその周辺の地域も含めると大カイロとなり，ゲジーラ島のカイロタワーに昇るとナイル川が大小の緑の島を浮かべて街の真ん中を貫流している様が良く分かる。東にムカッタムの丘，モスクの尖塔，西にピラミッドと果てしない砂漠，川に添って南北に延びる田園地帯，まさに雄大な自然と一体となった景観が広がるのである。

＊　＊　＊

このカイロは私には約１０年ぶりの再会である。変わった変わったと聞かされて来たせいか，逆に変わらないことの方が印象深かった。街中至るところが堀り返されて地下鉄やら高層ビルやらハイウェイやら建築ラッシュで，ほこりっぽい街がさらにほこりっぽくなり，交通渋滞もそろそろ先進国並になりそうな有り様だし，前述のごとく雄大な景色も所々ハイウェイに遮断され，店には輸入品が増えて激しいインフレとなりお金の単位がひとけた変わってしまった程の物価高ではあるものの，人々の生活の中は決して変わってはいない。モスクから流れるアザーン，街角にたたずみ水タバコをくゆらし一杯のお茶を楽しむ人々のおだやかな顔，昔ながらの裾の長いゆったりした服装（ガラビーヤ），誰にでも声を掛ける気軽さ，そして「ブクラ，インシャーアッラー，マーレーシュ（注４）」のやりとり，せわしない時の流れから取り残されたような感覚世界がここにはまだ現存している。

私達には不思議に懐かしいという気持ちではなく，昨日まで船橋にいて，今日はカイロの街を歩いているということが何かしら当然のことのように思われた。長い間忘れていた言葉が突然口に出て来る。人の顔も思い出す。夕方の涼風を求めて歩いていると，向こうから誰かがこちらをしきりに見る。突然指さして，声を挙げ，駆け寄って来て，「今までどこに行っていたんだ」と肩を抱き，揚げ句にほっぺたにキスの雨を降らして「お帰りなさい，お帰りなさい」と大騒ぎになる。「クント・フェーン？（今までどこに行っていたんだ）」と言えば，もうそれで今までの長い年月などなかったかのように自然に話が始まる。年月がおりなす様々な人生模様などはここでは関係がない。生きていてまたここに帰って来た，それがすべてなのだ。

エジプトの有名なことわざに「ナイルの水を飲みし者，ナイルに帰る」というのがあるが，どうも私達はナイルの水を飲みすぎたようだ。八百屋でも魚屋でもよく覚えていてくれて，「ハムド・リッラー・アッサラーマ（お帰りなさい）」と握手ぜめである。名前も告げず，ただマダム・ヤーバーニーヤ(日本人の奥さん）という付き合いだったのに。

＊　＊　＊

さてカイロに着いて１箇月が過ぎ，生活もようやく軌道に乗りつつあるが，アパートの大家の「ブクラ・インシャーアッラー・マァレイシュ」を前に不届の決意で続けてきた交渉にも少々疲れて来た。家が当初の約束どおりに整備されると転勤という事態になるのはここでは良くあることで，驚いてはいけない。カイロの賃貸アパートは家具付きで，家主の心がけが良ければ家具のみならず食器からシーツ，毛布まで付いていて，スーツケースだけで生活が始められるようになっている。私共の大家はこの同じビルの１階に家具屋を経営しているので，サロンの家具だけはすっかり売り物の新品に取り替えてもらったが，その他のことは遅々として進まない。家賃は２箇月分前払いしてあるので，約束どおりにやらないと２箇月で出ると脅かしているのだが，「マァレーシュ，あしたには必ず」といつも同じ返事ばかりなのだ。

大家は大層な美人の女主人で私達の隣に住んでいるので何かと都合は良いだろうと思う。巡礼を済ませてきてハッガ（女性形）の称号を持っているが，この一族はもともとポートサイド出身の密輸商人だったそうである。密輸で揚げた利益を使って家具屋だけではなくホテルなども経営しているようで，このビルの９階フロア全部自分の家にしていたが子供が成長したので，その３分の１を私達に貸したという訳で，自分の家はアパート３つ分の広さ，まるで女王様の御殿のような住まいである。

それに比べてこちらは高い家賃を払っているのにと腹も立つが，尤も私達も二人きりなので少々不備でもそんなに不便ではない。今は外人が少なくなりアパートも借り手市場だそうで，我々店子の方が有利な立場にあるが，どこでも似たようなトラブルがあるのは分かっているので私達もいまさら移りたくはないのが本音である。それに何日もかけて女中と一緒に拭いて拭いて拭きまくってピカピカに磨き上げたところだから，もし変わるとすれば清掃代を払って戴きたいくらいだと思っている。

私達の住まいはカイロのアパートとしては中位の広さだが，勿論日本で今まで住んでいた宿舎とは比較にならない。女中と一緒に拭き掃除をすると足の裏が痛くなるくらい広い。２サロン，２寝室，書斎（これがまだカートンが積んであって倉庫になっている），食堂，２トイレット，台所，という間取りで，今は仕方なく寝室に小さい机を置いて読み書きをし，食堂でレッスンを受けている。

＊　＊　＊

さていよいよ肝腎の勉強だが，カイロ大学大学院聴講生の手続きを進めている最中である。後述するがカイロ大学では外国人留学生に対しては一般的には聴講生の制度しか採っていない。幸いなことに夫が日本大使館の文化センター所長という任にあるので大学関係者と会う機会が多い。お陰で文学部哲学科のイスラム哲学のイラーキー教授の御指導を受けられることになった。昔からの私達の恩師のアラビア語学のシャラフ先生には先々週から個人教授をお願いして，家に来て戴いている。あれよあれよという間に周囲の状況がどんどん進んでいって，肝腎の本人がしっかりしないと置いてきぼりをくいそうである。

なんといってもやはり「現地」のありがたさで，日本からはどこへ注文しても絶版と言われていた本が街の本屋の書棚にひょいと見付かる。カイロの専門書店は下町に集中していて，本屋というより書庫という感じ，ほこりだらけの薄暗い店内に天井まで本が積み上げられていて，自分では捜せないところが多い。書名と著者名を言って，取り出してもらう仕組みである。うれしくてあれもこれもと買っていたらたちまちお小遣いがなくなってしまった。しかし発行数の少ない古典ものでも１冊が日本円に直して５００円から千円どまり，本が高くなったと言っても我々にはまだまだ安い。「こんな本を買う人はほかにいないよ」と本屋のおやじさんに言われながら買い込んで，本箱に並べて悦にいっているが，これを読まなければならないと思うと目が回りそうだ。

カイロ大学への手続きについて話そう。前述のようにこちらでは外国人留学生には一般には（私費であろうと国費であろうと）学部も院も聴講生の制度しかない。学部聴講生は高卒後２年以内，院は大卒以上なら制限はない。日本の学生の場合は，カイロに着いたらまず大使館に行き在留届けを出し，規定の書類に文化センター所長の紹介状を添えて，高等教育省の外国人学生受け入れ局（ワーフィディーン）へ出頭し，写真を添えて申し込む。ワーフィディーンでは当該学生についての公安局の審査を経た後に書類を大学へ送り，大学では受け入れを検討し，同意されれば，同意書をワーフィディーンへ送り返す。その同意書に基づいてワーフィディーンで最終的な許可書が作成され，再び大学に送付されて，やっと事務処理が終わるが，書類が大学に届いても何も知らせてくれないので，適当な時期に毎日大学事務局へ言って問い合わせる必要がある。いよいよ書類が届いたら授業料（’87年１０月現在，８２５米ドル）を払って学生証を発行して貰いそれを持って内務省（合同庁舎ムガンマア）へ在留届けを出しに行き，やっと授業

が受けられるということになる。書いて見るとたいしたことはないようだが，事務処理能力に極端に欠ける当国でのことをお忘れなく。

外国人が大学院へ正式に入学するのは非常に難しく，まず本国での成績証明喜，在学証明書，推薦書などの考えられる限りの書類を用意しておく必要がある。出願の手順は聴講生の場合と同じだが，こちらは大学で諮問委員会（ムアーダラ）に掛けられ，志望学部の専攻と日本での履修内容が一致するかどうか，厳しく審査される。長くアラブ諸国で勉強をしてアラビア語に堪能な人でも地理学へ入るのに3年かかったそうだ。宗教学やイスラム学をとなると，さぞかし大変だろうと誰しも思うのだが，ここでは東大の名前は実に偉大だったようで，ある東大出身の学生がすんなりと通ってしまったと，今やカイロ雀がかしましい。

＊　＊　＊

そろそろ九月も終わりというのにカイロはまだ暑い。朝夕はさすがに涼しい風が吹き，夜間に外にいると寒いくらいだが，室内は日中の熱がこもって寝苦しい。しかし朝でも窓を大きく開けるとハエが入って来るので空気を入れ換える程度にしか開けられない。やはりここは地の果てカイロなんである。

先日9月9日から19日までイスラム学の中村先生がおいでになった。こんなところでお会いすると何とも懐かしくうれしかったが，先生はやたらと遠慮なさって我が家には1度しか来て戴けなかった。でもイスラム学からこちらに留学している東長さんと一緒に3人で郊外のドミニコ派の修道院に高名なイスラム学者アナワーティ神父を訪ねる機会があり，良い思い出になった。アナワーティ神父は今年81歳とか，話好きの好々爺という感じで御機嫌で話が弾んだ。修道院に小さいが良く整った図書室があり，マルタ人のシスターやフランス人の若い神父が資料の整理を手伝っていて，貸し出しはしないが，閲覧は自由とのことだった。私が師事することになっているイラーキー先生の恩師でいらっしゃるそうで，早く彼と勉強を始めなさいと勧めて下さった。

修道院訪問の後カイロに戻って中村先生と要塞跡からイブン・ツールーンのモスク（注5）を訪ねた。その日は中村先生を歓迎して大使館の公使と夫の肝煎りでささやかな昼食会がホテルであり，東長さんも同席したが，私はメンバーに含まれていなくて一人家にもどった次第。

ともかく，大学関係者や文化人の便宜供与が文化センターの大事な仕事であるので先生方も研究室の皆様もカイロにおいでの際は是非私共にお世話をさせて下さい。決して御遠慮なさってはいけません。それで月給を貰っているのですから。

さて私のカイロ大学の手続きは一体どうなっているのでしょう。私の紹介状も立場上夫がサインをし，超特急でワーフィディーンから大学まで届いたことは分かっているが，その後は何度問い合わせてもなしのつぶて。もっとも大学事務の一般開始は今年は大統領選挙のためとかで10月17日になっている。正式に聴講生として登録されたという証明書がないと東大でも私の在学留学は許可されないのだそうで，タイムリミットが迫っている。この原稿が年報に載る頃，一体私の身分はどうなっているのでしょうか。

ともあれ，どんなにあがいてもここはカイロ，私もまた「ブクラ，インシャーアッラー」と諦めて，なるようになる「マァレーシュ」とつぶやくことにしなければなるまい。

（1987. 9. 22記）

注

(1) 969年エジプトを征服したファーティマ朝第4代のカリフ，ムイッズが新都を築き，その周囲に巡らした城壁。東西約0.9㎞，南北約1.2㎞。現在のイスラミックカイロに位置し，彼によって新都はアル・カーヒラ（カイロ）と命名された。

(2) Muḥammad ʿAlī（1769～1849）近代エジプト王朝の祖，アルバニア系と言われ，もとオスマン帝国の将校としてエジプトに派遣され，1805年エジプト総督に任命され，エジプトに近代化政策を実行した。ムハマド・アリー朝は1952年のナセル革命によるエ

ジプトの独立まで続いた。

(3) エジプト，シリア，アラビア半島のヒジャーズを支配したマムルーク朝（1250～1517）の初代女王。アイユーブ朝の奴隷軍団（マムルーク）が1250年反乱を起こして王朝を樹立，宮廷の女奴隷であったシャジャラ・アル・ドッルを初代スルタンとして戴いたが在位は僅か1年未満であったらしい。シャガレット・ドッルはカイロ方言による発音。

(4) アラブ諸国で多用される日常語で，ブクラは「明日，そのうち」，インシャーアッラーは「もし神が望み賜うならば，きっと，多分」，マァレーシュは「何でもない，気にするな」。詳しいことは拙稿「アラブの思考方法」中東協力センター・ニュース1986年6月号参照。

(5) トゥールーン朝（868～905）の創始者（Aḥmad Ibn Ṭūlūn）が建設したモスクで878年完成，カイロ市内に現存する最古のモスク（エジプトでは3番目）。螺旋階段の付いたミナレットが有名であり，頂上からは市内が一望出来る。